

## 大野ESD自然学校が作り出す多様な学び

著者	羽生 文彦
雑誌名	鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報
巻	6
ページ	37-42
別言語のタイトル	Various Learning that Ohno ESD Nature School creates
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/19173">http://hdl.handle.net/10232/19173</a>

# 大野 ESD 自然学校が作り出す多様な学び

垂水市役所企画課 羽生 文彦

## 1. これまでの経緯

平成 18 年 3 月、垂水市立大野小中学校は、その長い歴史に幕を下ろすこととなり、18 年 4 月以降の同施設の利活用について、検討が重ねられることとなる。

同施設の隣接地には、鹿児島大学農学部附属高隈演習林（以下、演習林とする）が位置している。同施設では、井倉洋二准教授が中心となり、1999（平成 11）年より地域の子どもたちや一般を対象とした様々な森林環境教育プログラムを実施していた。大野小中学校が閉校となった折、井倉准教授は、自身が推し進めている森林環境教育プログラムの重要性を認識し、更なる展開を考えていた時期であった。そのような状況の下、井倉准教授が旧大野小中学校施設の利活用案として提案したのが、旧大野小中学校を森林環境教育プログラムの拠点＝自然学校としての利活用案である。

一方で、市町村合併離脱後単独での道を進まざるを得なかった垂水市は、鹿児島大学生涯学習教育研究センターに指導・助言を仰いでいるという経緯があった。生涯学習教育研究センターの小栗准教授を始めとする教授陣は、井倉准教授の案を検討し、森林環境教育プログラムにのみとどまらない広い意味での学びの場としての利活用案に昇華させた。これが、「大野 ESD 自然学校」構想である。



写真 1. 旧大野小中学校

「大野 ESD 自然学校」は、平成 21 年度現在試行段階であり、設立目的も明確には定められていないのだが、井倉准教授は、試行期間開始に際し、一つの理念を掲げる（井倉、2006）。それによると、大野 ESD 自然学校は、垂水市・鹿児島大学（及び演習林）・地域（大野地区）の三者の協力の下運営される組織であり、環境教育・ESD プログラムを通じて、大学生・児童生徒・地域住民及び一般市民が互いに学び合うことにより、大学の教育研究と地域および社会教育に貢献することを目的とする機関と定義される。全国でも「ESD」を冠する自然学校施設はまだなく、垂水市が全国の先駆けとなる可能性を孕んだ施設である。

平成 18 年 4 月より、大野 ESD 自然学校設立に向けての体制整備が開始された。旧大野小中学校施設は大野地区公民館別館と位置づけられていることから、平成 18 年度は教育委員会社会教育課が主管課となり、様々な事業を展開した。

しかし、大野 ESD 自然学校が、単に体験活動とそれに伴う感動を提供するだけでなく、地域活性化或いはコミュニティビジネスの要素を含んでいることから、平成 19 年 4 月より主管課が企画課に移譲されることとなった。

現在は試行期間と位置づけられ、正式発足を目指し、事業運営を行っている状況である。

## 2. 大野 ESD 自然学校が作り出す学びの現状

### 1) 森林環境教育プログラム

大野 ESD 自然学校が提供する学びには、大別して幾つかの項目に分類することができる。まず、設立準備事業当初より進められてきた項目である森林環境教育プログラムについて述べる。

筆者が最初に携わったのは、垂水小学校が実施する、総合的な学習の時間を利用した自然体験活動であった。この活動は、1 学期の「川の源流探検」、2 学期の「森のたんけんたい」から成る。「川の源流探検」は、演習林内串良川を踏査し、源流の様子を観察するという活動で、水の循環や森林と川の関わりについても学ぶことができる活動であ

る。また、途中様々なアクティビティを挟むことで、川の自然を、五感を使って総合的に学ぶこともできる。「森のたんけんたい」は、演習林内での様々なアクティビティを通して、森林の働きや森林で生活する様々な生き物の繋がりについて学ぶという活動である。この2つの活動を通じて、森と川の働きだけでなく、両者の関係、さらに、それらが我々の生活に如何に関わりあっているかということも学ぶことができる。

平成19年度より、3学期にかつて演習林が実施していた「林業体験」が復活することになる。林業体験を通して、林業の大切さを学ぶだけでなく、「森林と人間の関わり」をより分かりやすく学ぶことができる。



写真2 川の源流探検の様子

平成21年度現在では、垂水小学校だけでなく垂水市内の水之上小学校、新城小学校、垂水高校が総合的な学習の時間を利用した活動（沢登り）を実施しており、協和小学校が沢登りを含む宿泊学習を実施している。また、垂水中学校は、旧大野中中学校の学校林をフィールドとした活動を実施している。

また、学校単位ではないものの、柘原地区の子ども達は、スポーツ少年団の活動の一環として、演習林での沢登りを含む大野ESD自然学校での活動を実施している。沢登り活動ではないが、牛根地区にある3つの小学校も、公民館単位で大野ESD自然学校での活動を実施している。

このように、本市においては、殆どの子ども達が、大野ESD自然学校での森林環境教育プログラムを経験している。しかも、それは体験活動に裏打ちされた、実践的な森林環境教育プログラムである。昨今、子ども達の間でも、「エ

コ」という言葉が日常的に使用されるようになったが、演習林での森林環境教育プログラムを経験した子ども達は、その言葉が意味するところ、環境保全の重要性を、体験的に学ぶことになる。まさに、地球環境的な観点からの「ESD」教育と言えよう。

また、学ぶ側の子ども達だけでなく、教える側の教員を対象とした事業も実施している。一般を対象とした「森林環境教育ワークショップ in たかくま」がそれで、鹿児島県・演習林・大野ESD自然学校が主催し、NPO法人くすの木自然館・垂水市との共催の下実施される事業である。2泊3日の活動を通し、森林環境教育を実践的に習得し、指導者となることを目指す事業であり、垂水市内の教職員の多くの方が参加した実績がある。この事業を通して、自身が森林環境教育プログラムの実践者となることで、様々なことを子ども達や保護者に伝えていくことが可能となる。事前・事後の授業も、より充実した内容のものとなり、子ども達の理解はより深いものとなる。「森林環境教育ワークショップ in たかくま」では、最後に参加者がプログラムを実際に企画するのだが、前述した垂水中学校の学校林での活動は、この企画が素案となったものである。このように、参加者がそれぞれの職場で、森林環境教育プログラムを広めていくことも重要な点である。



写真3 森林環境教育ワークショップの様子

勿論、これらの事業は、子ども達や教員だけを対象とするのではなく、例えば沢登り体験教室などの事業において、広く一般の方に体験していただいている。これまで述べたような様々な要素を、一般の方にも学んでいただける場として、大野ESD自然学校が機能していると言えよう。

地理的なことで言えば、大野ESD自然学校の事業は垂



水市を中心としながらも、市外民にも広く開かれており、実際に、東串良の子ども会育成会、串良町の子ども育成会、志布志市立宇都中学校などが大野 ESD 自然学校での森林環境教育プログラム（沢登り）を実施している。大野 ESD 自然学校での自然体験活動とそれが齎す学びが、垂水市内に留まらず、広く浸透しつつある状況にあると言える。

## 2) 野外教育プログラム

森林環境教育プログラムも、広い意味では野外教育プログラムに含まれると考えるが、大野 ESD 自然学校での活動は、森林環境教育プログラムの範疇に入りきらないものもあるので、ここではあえて分けて記述することにする。

幼少期の体験の重要性は、本稿で述べるまでもなく様々な論で指摘されているところであるが、実際に大野 ESD 自然学校のプログラムに携わっていると、子ども達が、活動を通して、自然に触れ、様々なことを学ぶ様子が実感できる。また、他者と一緒に活動することで、人間関係の構築法についても実践的に学んでいることも実感できる。つまり、大野 ESD 自然学校での体験を通して、昨今重要視されている「生きる力」を学ぶことができると言える。自然学校の行事に参加してくれる子ども達が、年齢や経験とともに、明らかに人間的な成長を感じさせることもある。

また、郷土の豊かな自然にふれ、何事にも代え難い思い出を作ることは、郷土愛護思想を育むことにもつながる。やや飛躍するが、そういった郷土を愛する気持ちから、「大人になっても垂水市に住もう」という気持ちが喚起され、実際に将来垂水市民として生きる選択を導く要素の一つとなるかもしれない。大野 ESD 自然学校での体験は、「持続可能な地域づくり」という命題に対する回答の一つに成り



写真4 大野 ESD 自然学校主催事業の様子

得るのでは、と思う。

また、大野 ESD 自然学校での活動に際しては、学生がスタッフとして同行し、子ども達と活動を共にするが、学生にとっても、この経験は貴重な「学び」の場となる。子ども達に自分の知識を伝えることで、さらに自分の知識を深いものとするだけでなく、人に伝えることの難しさを学ぶ。更に、自分とは異なる世代との接し方についても学ぶことができる。このように、様々なことについて学ぶ大野 ESD 自然学校での活動は、井倉准教授が予てより公言している「新しい大学教育の創造」の場と成り得ると考える。



写真5 子ども達と活動する学生

## 3) 地域活性化に関するプログラム

過去3年間の大野 ESD 自然学校の利用実績について記すと、表1のようになる。

このように、数字の上でも、大野 ESD 自然学校がそれなりの利用実績があり、しかも、その数値は年々上昇していることが分かる。

が、これらの実績については、主に森林環境教育プログラム、野外教育プログラムに関する数値である。大野 ESD 自然学校設立の目標の一つに、「地域活性化」という要素があげられるが、この利用実績には、地域活性化に関するプログラムはあまり反映されていないと言わざるを得ない。

### (a) 「地域活性化」という言葉の問題

そもそも、「地域活性化」という言葉自体、非常に包括的なものであり、それ故に極めて利便性の高い言葉であるため、安易に使用されるきらいがある。しかし、それが具体的に何を指すのか、明確に定義しておかねば意味を為さない言葉である。大野 ESD 自然学校が謳う「地域活性化」

	利用者計	延換算	児童生徒利用者 延人数	一般利用者 延人数	市民利用者 延人数	市外民利用者 延人数
平成18年度	1,207	1,671	1,196	475	998	673
平成19年度	1,772	2,224	1,500	724	1,262	962
平成20年度	1,962	2,495	1,765	730	1,850	645
合計	4,941	6,390	4,461	1,929	4,110	2,280

	総事業		ESD プログラム		総事業 従事スタッフ延人数			ESDプログラム 従事スタッフ延人数		
	事業数	日数	事業数	実施日数	市職員	大学職員	学生スタッフ	市職員	大学職員	学生スタッフ
平成18年度	35	54	34	53	132	62	144	129	62	144
平成19年度	48	77	40	69	144	85	176	131	81	173
平成20年度	72	96	51	74	178	81	241	133	72	231
合計	155	227	125	196	454	228	561	393	215	548

表1 大野ESD自然学校利用実績

についても、当初より何を指すのか、議論が続けられてきた。実は、試行期間4年目になる今年度に至っても、この議論には結論が出ていない状況である。

(b). 現体制での評価

現段階で、大野ESD自然学校が地域活性化に寄与していることとして、各種地域行事に、学生が参加することがあげられる。夏祭り、豊年祭、敬老会、門松作り等の各種行事に学生が参加し、特に豊年祭においては、伝統芸能である棒踊りの奉納も務める。これらは、直接的に伝統芸能や山村文化の継承という意味で評価されるほか、高齢化が進む山村集落において、若年層が参加することにより、地域民の精神的な活性化に寄与していると評価できよう。

大野ESD自然学校では、年1回、鹿児島女子短期大学を受け入れている。具体的な活動プログラム内容は、午前中にソバ作りを婦人会の指導の下行い、午後からはミニ門松作りを高齢者の指導の下行うといったものである。ミニ門松には、注連縄で飾りをつけるが、注連縄作りという行為は、山村文化の継承体験である。また、若年層との交流により、精神的な活性化が促進されている。一つのプログラムの開発事例として評価できよう。現段階では年間を通してこの1件であるが、将来的には更なるプログラムの作成に努めたい。

このほか、遊耕地を利用した農業体験も地域活性化に関するプログラムとしてあげられる。これは、講師依頼・土地借用に関する謝金・種苗等の購入費など、地域民への謝礼が“目に見える”形で行われている。また、自身の技術を伝達することで、生きがい作りと誇りの創造にも繋がる。



写真6 鹿児島女子短期大学生と地域民の交流

また、婦人会への調理依頼や、地域からの食材購入等も、経済的な地域活性化に貢献をしているという点で評価できよう。

(c). 現状認識と今後の課題

しかしながら、現状では、これらが大野ESD自然学校の全プログラムに占める割合は、非常に低いと言わざるを得ない。

また、これらのプログラムを通じて大野ESD自然学校と関わる地域民の数も多くはなく、地域民の大半が、試行開始4年目の現在でも、大野ESD自然学校の活動内容について熟知しているとは言い難い状況である。まして、その存在意義について、明確に理解している地域民は、ごく少数に過ぎない。

このような状況を打破するために、現在主に地域民を主体とし、大野ESD自然学校の運営等について助言し、地

域民が主体的に大野 ESD 自然学校と関わることを目的とする組織である「大野 ESD 自然学校協議会」を立ち上げる試みが開始された。だが、この試みもやっと動きだした段階であり、それが目的どおり機能するのはまだまだ時間がかかると考えられる。

大野 ESD 自然学校の、地域活性化のための機能が、この4年間で多少なりとも見えてきたことは評価されてしかるべきであるが、今後その面をいかに充実させるのか、地域民が大野 ESD 自然学校に何を望み、今後どのような協力ができるのか、まだまだ模索期間は続くと考えられる。

### 3. 今後の課題

このように、大野 ESD 自然学校では、過去3年の実績を通じ、森林環境教育プログラムを含む広い意味での野外教育分野において、様々な学びを提供する場として機能し始めたと言える。

一方で、地域活性化という面においては、まだまだ課題が残る。将来的には、この課題の解決のために、さらなる検討が必要であろう。

が、ここで留意しておきたいのが、現在は大野 ESD 自然学校を正式に発足させるための試行期間である、という点である。過去3年間、様々な試行がなされてきたが、それは単に大野 ESD 自然学校の正式発足を目指すだけでなく、その存在意義と必要性をも明らかにするための作業でもあった。

現在、大野 ESD 自然学校に要求されている効果は、森林環境教育プログラムを含む広い意味での野外教育プログラム、すなわち教育的効果と、地域活性化面の効果の2つであり、それらはどちらも必要なものである。最終的には、それらが2つとも十分に機能する組織となることを目標とすることは、極めて重要且つ必要なことであろう。

しかるに、その2つの効果を十分に機能させるために、現状を鑑みるとどうか。

現在、大野 ESD 自然学校には、市職員1名と、臨時職員1名の計2名が常駐し、その任にあたっている。現場の人間である筆者は、正直なところ、これ以上業務を増やすことはできない、と判断している。その理由は、今後地域活性化面を押し進めるためには、教育面に割いている労力を減らさなければならない。無論、見直してしかるべきプログラムもあるであろうが、教育面については漸く評価される段階まで来ているところであり、ここで業務を減らし

たら、少なくとも現状より後退してしまうのは避けられないであろう。

かといって、職員の増員は、現状では望むべくもない状況である。

ところで、大野 ESD 自然学校に要求される2つの効果、すなわち教育的効果と、地域活性化における効果については、本章では並列で優劣をつけるべきものではないという前提の下で文を進めてきた。確かにどちらも優劣はつけられないが、微妙に意味合いが異なるのではと感じる。

その差異は、対象地域と対象住民の差異に起因する。教育的効果について言えば、大野地区に特化されるものではなく、広く垂水市民、更に言えば市外民をも対象とした効果であり、大野地区に特化されるべき属性を有するものではない、と言えよう。このように広域な地域・住民が対象となるので、個人的な見解であるが、所管についても、従来のように企画課ではなく、教育委員会で所管し、より広域な事業展開を図るべきではないかと考える。

しかるに、地域活性化に関する効果は、高齢化率が進み、学校閉校という状況を迎え、持続性が極めて危ぶまれている大野地区の地域活性化を目標とするもので、正しく大野地区に特化されるべき属性を有すると考える。大野地域・住民にとっては、この属性こそが大野 ESD 自然学校に最も要求することで、現状の体制では対応が不足している点でもある。今後の対応について、検討が必要であり、且つその対応は急務とされるべきものである。所管については、従来のとおり企画課で事業展開を図るべきであろうが、場合によっては、自然学校という形に囚われずに、地域活性化という命題に取り組む新たな体制を整備する必要もあるのではないだろうか。

筆者のあくまで個人的な考えであるが、これらの考えから、大野 ESD 自然学校の目的を達成するためには、思い切った体制についても2分してはどうかと考える。つまり、教育的な分野については教育委員会で管理し、地域活性化に係る分野については企画課で管理する、という体制である。

無論、この体制は恒久的なものである必要はなく、将来的には、分散した体制の統合についても検討してしかるべきであろう。

あるいは、対外的には、大野 ESD 自然学校という大きな枠の中に、2つの部門があるというように示しても良い。そうすれば利用者側としても混乱することもなく、自然学校としても、ニーズに合わせた事業を展開することが可能



となる。

ここで述べておきたいのは、体制を2分することが肝要である、ということでは決してない。現状を正確に分析し、課題を解決するための体制整備を検討する時期に来ているのでは、ということである。

## 4 . おわりに

冒頭より何度も述べてきているように、大野ESD自然学校設立準備事業も4年目を向かえ、何らかの答えを出すことが求められている時期に差し掛かっている。

英断が要求される厳しい時期であるが、山積する問題に僅かでも最善を尽くすべく努めるのみである。

### 参考・引用文献

井倉洋二(2006) : 大野ESD自然学校—鹿児島大学と地域が連携した新しい自然学校のとりくみ